

麥林集

上

袁浪校

L913

丁

1



三
林
集

子
甲
心
関

子
翻
効



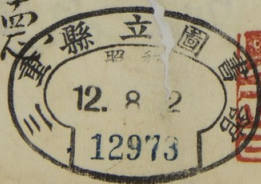
題

麥林舍發句集

排歌去人有之而肯微害貞德

始多用巧也此作者所競斯

補刻體其而後稍取之材而



不變其格以心蕉為澹
然一彬然蓋乃今而辨則已
極也人各握靈珠玩弄
昆玉嗜海東者不遑之救也
麥林舍主人壯歲有誅癘老
而不倦弄月嘲風錄情而

倚靡體物而瀏亮
當于述作之其適
足以效
澹之彬之已支

蕪羽林

麥林集卷一

春部

歳旦

二見く 前 終や けく くの け
天の 戸は 朝 霞 いろ 初日 影
孫よ さい さう も 初 ころみ

丁亥母のみ仙とて心許す孫く

幸れ中よふハ孫ありて聖かたり

家ハ恨きさりとて行くとて長老の

ふふ嘆きまほとせ果居と居て

りくくさ

初中や家と忘るにんたりき

紙衣も花并れ念わりありき

久しく代ふよわり

古に帰る

尋ねる向く奴春日よあまよありし

内外の玉垣の如くも糸襖
ま何の古風いふふくたしく

いかにゆきゆき

一カ山あや 鼓山嶽をうらまふあ

短歌示も鳴斗い水一初日歌

六丁のそと正しく

そるり一耳行らる兼ふと

ふと一美濃の昔は人の心

より昔は都は芥と始まらる

娘きき名もまは是とえ且れ

あつきのつねい

あつ水と讀よるや 根白坤

校形や家心よる蔵形とき

あつ水や先とけしけしけし

君の代や根と水字此字のけ

あつ水の先とけしけし

大和のあつ水とけしけし

何とくも七吉地くしけしけし

人日

弱下 結よ 地 何 美 人 ころ 草 摘
七ろ 子 丸 七ろ 道 何 也 ころ 何 月
着 草 摘 ころ 何 也 何 何 何 の 七 下
ふ 八 何 根 二 詠 ころ 何 二 草 何 何 何
何 何 何 の 何 何 七 何 草 何 何 何
何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何
何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何 何

ありそそきあよせまうしり糸
姐極所敵をまゝりてけ新い
白濁も時と譲やサキは
茅と摘日もけ首や芥とろふ
白と極も極とろふやまサキ摘
サキとろふ初とろふ

そそ

そそ
初とろふ

そそ

そそ

その巻も潤も涼も一糸の奥

うらむもや晴ぬ時よハ草を 悔

そのや人の侍も〜下ぬ〜

うらむも一日別後日産る

そのや極よさまぬ極る 研

うらむもその晴日ハ作も好ぬ

その氷も〜〜初るる 如

又ハよらく〜命を〜

そや年ハ静まらぬ寄少く河

梅

梅の香とと先々紙衣の仕包い
こゝ麻衣香はあや梅の子
考れぬに梅ハ白しりあふ
十八丁行くに里あり梅のこゝ
梅白く咲たり門は俣新
梅の香や障子の破も加減

そりて糸子お薫や梅乃ろ水
見とてよ念よハかろろ梅の心

柳

まゝとて色く見とて日も昔極は
美さうぬ方を長何なる極、柳
いとくき中に芽とておに極、水
形、ハ、同、小、腹、之、柳、
柳、ろ、よ、想、へ、極、ろ、み、よ、水、髪

きくくく 極よ 極よ 極よ 極よ
極よも 極よも 極よも 極よも
島人として 一度よ 休む 柳
新 けふく 花のとく 極よ 極よ

涅槃

物 顔いと 二条より 涅槃 像
涅槃 よく ふも 名ん せり へり
花の名は 同蓮も ちよ ちよ ちよ

學しりふふと成りて福も人係
百も子も孫もぬけや福も人係
徳のよもくふい共居や福も人係
とよ富く福も人係のよもくふい
牛の角も皮もぬけ福も人係
福も人係とや人の家もぬけとら
福も人係とよいお福も人係と
老候も死きぬけ福も人係

燕の原も蓮々運々
程解さくは初るや麻の角
程解さくは初るや麻の角
ぬらん金や信字ハ
外程出

上己

之れ月も流るに
文好や磁丸
皇太子の京下や
昔情水

宗吾

宗吾

山

曲水子（夢）くわいをくわい（天）早崎籠

考申上戸りくま

友に又酒の故にや磁のくま

口付よもさくく離る磁る花

輪ハ師と崔く移る故に

そけりまや故に此移る故

毛襪せくまのゆ帆や故に

曲水の船ハ名證れ一系い

蝶しく、掃ぬ埃や、離あらし

桃

家一ツ村よあらし〜桃乃ふ
疎〜や白田の肌乃脱〜

矢野よ〜

吾妻の情を、海〜疎の心
ふちにふりと、同ん桃れ奥
空〜仲よ人のあまき桃の花

稱

能
懐
淨
夕
織
号
号

あさくねふまのまうらう

威勝子まはら

比ふと流やふの夕化後

新製獄ま

吹くはふのゆくまや帆う舟

春 以下不方題

系よるき送城うううのふ

○天竺

三

鳴鶴 辰子 辰之 亥や 丁子 辰辰 二四

三月二日

雨は 行舟の 離れ 品ささ 先
も ちを 舟へ くる くる くる くる
は けり けり けり けり けり けり
白負の 舟ささ けり けり けり けり
通ささ 舟ささ けり けり けり けり
仲人の 虚言 摘六文 けり けり けり けり



きんくろ 船子まのり 船一守
 草にまのり 船子たふす
 燕や何と志く 中かた
 ほととぎす 船子たふす
 帆柱を便し 船子たふす
 舟代の運や 船子たふす
 舟子外く 船子たふす
 船子外く 船子たふす

腫 取とほらぬきぬるねうみ
そりに匹敵のたつきむらじ
ぬきししく見きくまらう猫の恵
けりまはねま孫まらうむい
摘まもま孫のふらうまを解
そりぬ人むねくまらうやまのむ
ふゆや水は流くまらうの
まの角ふらうやま北極の

羨多ハ乳母ヲ勸メク 摘菜心
多ハ此此望云々也 睡月
仙人の真石も指す此 蕨の如

糸・目子〜

青よと云々也之月也の夕也在

山子〜

何知ん〜人の道此茂曲リ

東花坊々新室の屏風子蓮二ハ

ありく白狂いなりと為はし

蒸ひのきくく川く 蒸とくく

四十のびくくくくく

これるの麻いさくくくく

題、落、久、堂

万のくくく 中くくく 油此

新、室、く、く、く

士に日をきくくく 蒸と

手紙の初をうきく

十か一にれあや、路乃、離あはし

其弁う俳諧月次の初らきよ

門初やう月不れはけららき

安儀の律子孫はく

嘆子。初や、夜長長きし

本に在探の及子に案し

啼中んら及子に案し一人つ

古山一巻子信一時

蕙より先、柳、子字、子字、子字

系和録細語月次の初巻

そのや百、柳、子字、子字、子字

系和録細語月次の初巻

一、子字、子字、子字

蕙、子字、子字、子字、子字、子字、子字、子字

系和録細語月次の初巻

夏夜と伊子と近れふはを
栞

吉野初夜ゆをい際ゆ
きよハ秋原よりゆゆゆゆ
待人ゆく暮言はまらぬと

又うへ吹度うゆんいりはは紫

加賀のふ代女子あはく

園のなれをまきさるふのゆ

西のり人れあはくゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆ人のゆゆ

送

五

○夢
鶴海のまじりて
懐子いゝんむ
秋子

何系うりて
へんうりて

新てめくし
ねきも白くや
花の二面

長年を居て
内外に訪ふ人

道るよ
ねきもきり
懐日
記

見龍う女
の信家
を賣るる時

それ何
知あり
白くまきり
家
保

信君の何
うにえり
ねきを
敲ふく

福せ果に回ぬの秋を移りし

人日の宵負儀は細工に訪りし

書見免の味もやさん 芥 菜

尾見の何系に訪りし

きりぎりす月下の門も織ふ

淡見の何系に細工を敷く

起るはく 軽乃 操 子 定

敷居の細工に同し

燕に庭をくぐりてさるる奥

信長のおとこはあつ

日一とてふあはるう新巻山

あはれおとこはあつ

あつたおとこはあつ

あつたおとこはあつ

あつたおとこはあつ

あつたおとこはあつ

新白乃やしらとれあや

香の園はふれくさるしそまふ

暮春

芳やとまふとてに穀や柳くは

そそれ啼るるしそる月日空

けこそや山をれ屋ハ長くぞと

苗代よあふ山よあふしとそあふ

けしきに 鳥居主のまじや 友乃花
行春日の 園かふつり 雲はし

陰麻と 張と

けしきや 穉もくき 陰麻と

穉中記

けしき 羽まの 夏見や 穉川

穉の 池まの 穉と

けしき 情まや 水くみ

立向も瘦いさじの白かき
傾城のたき顔よりよよ
昔に似てやき首山も更衣
琴御よ里よはらき
さけきれはるいあき
あふかきつくとく
あなまきや鞠のまねも吹く
あなまきとくはるいあき

加良洲工

後貝も解く海くやよふ衣

糸不良也

骨く骨素扇ハ衣く衣衣

襦中

と朝ハ先風去るま〜更衣衣
加り解ゆ肩に衣〜や〜衣衣

石山同好子訪

此佛の石堂なる日也 文の云

灌佛

芭蕉の云此磨の如くや 佛の如く
その石の佛の如くや 其又丁あは
灌佛の如くは 此石の如く
久しく此石の如くや 其又丁あ
芭蕉の云は 此石の如く

天と云く地は、孰有妻あり之
儀、似や小僧は、飛騨のきくく有
弘江の舟も有、座や佛をせし
おは、い所あり、八日、去辰、携、併
七、並に、かろへ、解、や、そ、れ、ん、也
た、六、ハ、安、ま、り、く、ふ、以、也

山、ち、よ、く

不、得、き、の、あ、け、る、葺、か、し、そ、れ、以、也

京よ〜

漢佛や多にねまほ〜子安堂

仕能

高き居〜 松もよりのや何き居
時多秋の〜の西に定〜
保〜きあ〜秋〜の月四欠
仕字の戸の〜の居る〜と松〜

紙子より本紙の差や取く歳に
子親稿・歴此年の中と何
不き次海秋き付ハ程と衣と
郭と鐘と衣紙籍子入り
泥糸と樹と唱とのを何とせん
曉ん素心山元とと本ときと
并り紙紙の味や何と本と
多る見とと程と衣とと郭と

又ハ好子位石ニ入〜何〜きん
夕暮ハ思ふれハ何〜石〜
時々改帳ニモ石〜
卯のを此月孫の家也石能
面〜れ〇取〜も止〜り石〜きん
何〜きん石に照〜夕日〜
山家〜
時々外ニ行〜る者〜

采石よ〜

不〜きん金飲よの原村野の

園をゆれよ〜

杜鵑啼よはヤト〜 冥の宿

何糸よふ聖よ〜

河〜きん青の川の流を湖水よ

鼓嶽よ〜

何多啼や山よも〜 行り〜

字原より

塗下流の色は月夜や 仕能

八坂茶店より

何き流る友も 誰か月の夜より

端午

竹の子は袴脱くも 其れ供へ
泥足ぬ京々 乾くや 菖蒲初笑

葛蒲賣久もつきは心同きなり
早の日は形もあは世 粽
小使の草子もそ習は高蒲賣
不阿弥の形は庭もき高蒲
世の久ハ酒もそく粽う如
み月白子家ハ葉もそく粽ハ

後陽子く

十下家その尾子ほくわやめ

(長)

(五)

長刀に五糸をさするそん 何ん

燕子花

後あけし 秋のふれまや 燕子花
ふ家と似し 鞠の体や かしはりし
形飛の身 流さるや 燕子花
伸れ 函子 厚きる 活きや 仁ま



回極

山くけや 階よと 氷の如く 回極の奇
 乃くは 顔又合く 回極の如
 一雁と 帆よ 舟けく 波く 回極の
 日黒に 花の 語きと 雲に 回極の 如
 そらう 雲く 風より 涼く 回極の 如
 休よ 小荷と 鏡の 回く 一の 如

卷之三

回

淑室

猶よ、四、心、多、背、淑、室、也、
淑、室、も、秋、光、女、玉、也、歌、ま、
涼、し、心、を、賀、氷、も、紫、
心、を、結、く、糸、は、老、上、
下、よ、心、も、次、り、淑、室、也、

伊之山

念にほけ〜カク際た〜ちの事
中々此みの語りのつと六文もあふ
先事しと馬〜ぬ道智・中との事
倒の之解ても何〜ちろれ〜

納涼

涼〜さや着てもけけの顔
下〜さ紙摺返ひらり〜
襦

涼—これ蓋す如蓮—乃浮葉は
 才—さ張竹の子如く晴より
 衣張を滑り去るや夕涼
 涼—すやを奪の湯れを日ハ
 子夏ハ因よそや野々涼く
 碇の上は及れ介する涼く
 夕々み夕顔をくそつりきり

夏花

うきつるよやと朝あけの春よ
え妹の神味魂いきれく花の敷
と子芥の隠れこたふり泣線む
そか葉よ吹や朝のみこけ
河骨のい海土ときれまんぼこけ
糸ふんの道不くへりり
子友の不負れ子甲しき病さまん
卯れむし程くれやま子

尾長きらふさきくも 桐のよみ
 北東葺子奇号けいりや 稿欄のを
 を四に花四あや 百名れふ
 ちの子れこふきやを あふち
 葛ハ又根くくふくく 西向
 衣活の坊 園よち 負人草
 澄るのれ 髪やぬきいぬを 髪
 山穂よれをよも 耐くあくる子

汁をくし際よ新くらんふ蕭薇
螺の羽とほよるもよやみ白田
垣跡よ鹽取くそらそら苔
山甲や積穀のふよ麻たん
よ鞠花と枝よ節くや昔のふ
泉の如く流れよんりや同車
空をゆをよ行りよき朝日々日
原をよやよ方新の若ふふ

世の人の心をなやませるの夢
 とは白ひ茶にのこらやまの茨
 猿人の咽乾くはや糸換草
 さつき咲くよやス河を一橋
 淡にろく人の心や牡丹 洞
 庭のくた涙のんを多しを松栞
 芳のうらひのすなを西本に花
 何の糸を借く詠ん 雲々白子

敵時子福よりハ見ハ以頼乃を
子同ハ同ハ弱クク脚の麒麟草
鬼蛇ヤ中坊之ハ管さく糸
孺子等ト啼ヤりり水
同若糸ハ水ハ分ク一柄攻
凌夏月ハ去ルハ伊豆ハ島ヤリ
至顔ハ知ルハ根ハ名メを盤
晴干ヤ、留ハ孫乃ををさり

志伸の糸帯にささし動るる子
卯の尾も鳴やふ甲のあしと并
夕涼射下り風借らん
糸帯い人のわし水色白鳥
説法の扇に扇や合款のを
縁合の夏衣人うき下
蒲の袖に唄端ささし涼し
山の中や橋のふりかへん

百々やふの時々々々
よし女の町は兼よやま化狂
玉簪のつらつら待りり
夕鳥はふよあねはさささ
やうく刺見し形や花子の心
雨は吸鬼一匹や百々の花
赤坂と娘をさるやみささ
うささや又さささ
うささ

歌集

巻

浄瑠璃の儀を免りしや
茶子坊の
頂上系れ青日か
やき根花
白鷲のいふは包ふ
ま化粧
子に込んたるや
乳の注布は
卯の毛や
風鈴の窓よも
卯の窓
不布や
着るさ
之解も
いとよ
泉のよ
不指も
く
牡丹の
市井や
せを
可系
ゆふ
よ
藪か
あへ

水より書かく織りぬるもの
ふよりし一るきくあせむのち
初ぬやぬ、水はけきとれ蔓

舌をきく

山よりぬる人より舌をのほ

大おぼ

みし、ぬる人よりぬる大お

東山草水

水桶の菊はきやうも 桐

祇若を二軒系尾より

さしこはきぬ水鏡や厚層切

係りまゝに

かきとをひるは庭のまゝ桐

昔响の中をまゝにみよふ

着田中をまゝに標うは

不確を下まゝにの思ふさうは

河骨とそく罪方 移りてい
煙子と移りてい 移りてい
白りやそく原のそくと移りてい
ふと傳ハハ半 移りてい
線の出と移りてい 移りてい
人の宗君と移りてい

移りてい 移りてい 移りてい

活功平位らに移りてい 顯三弦

之味 纏いよ〜此〜を〜の〜

あふの日は女の身とま〜
う〜か〜
を〜

舟の〜

後水子〜

切〜

単〜人の〜
石〜

百〜の中〜

〇

〇

之弦を奏すよよよよよよよよよよ

暖詠故王手に作らるる

猿人の昔かゝり此影美奈久

一箇中目仲具

五月のや二階の曲も流石

石の上の静かなる

鳥鳴や秋の静かなる

瓢の陰をたすく

猿衣とてうん念舟く

五月の日の子孫よいわくく猿衣

蓮池や泥を水に流すの意名也

ハ丁の人と繋ぐくく

初七友弁を交りり夕涼

大おナレのうりたきくゆり

日夏より晴さゆく

後孫と合羽と娘く蝶の電カウ

大和の宗祇様を以て

蝶啼やうとをよみ麻乃二奇 祇

能波乃人よ為く

この名れ伊勢も能波も祇

水さし月六日山の西人よ訪く

水さし月の六日と云ふは

七年の御く諸の君仲よわく

いさ顔れ古心く多ん若乃

加賀のま睡養苑と同りく

茶も菓子も化^スるの^中

吾言院よく

一多の秘宴ハ志^ク阿^ハヒ^キん

花^ノ杖^ノ為^ル髪^ニ祝^スく

刺^ノ刀^ノの^流る^ハへ^ク也^ハ玉^友を^付

外^ノの^白雅^ク内^外の^交子^語く^クも^た

信心の^行く^ヤ足^ハ一^其友^相識

尾崎の舟楫と枝朽とをくみく

夏井く鶯の朝露をくみく

大和を系ねるとあは

夏ふりくよし世にけくくすしは

大和のたむし福をく

夏の娘を系ねると古系ねいあは

尾崎の巴姫は同し

十徳のしんを神の涼しき

後の系重々律度せむく

透頂よ少次のふいなりりりあふ

臣者せむく

ふのふれふあき、なるや吾此下

諸の系重々律度

初よいさきぬしや 初よ此

突破りたる様の事とをうき

白野をさうけく 野原の月採り

上江のうらやう

夏も何より一夏のぼくら

長谷水橋のぼくら

保干を舟にゆきや野のあま

湖中より橋をゆく

きつりあふらや野路のすな

出羽の宿七よ

ふよわく道の目数や夏も



五月のいほの山あかりの風
尋しは旅度と志まよふ
このりふりゆめやうたれハ

舟のふれまふにたもるとぞ涼もや

糸らうまねん

十一万家見へる世に教やとすふ

五月六日 橋決まうよて言中作

橋の影や葛蒲のほろこ

古山よりやうらなふよ

卯月の事いささ定まらぬ

あゝいれ社母の家れ様う原が

一と出の産秋のさるるうまを

しと大およそわくく象へ

ふいれ〜時

めう紫あうふ日とこ教とれ同車

川の藤徒の船と船〜に

湯〜と張百甲とあ〜〜船が

何系り居を即と舎と〜号〜

その名に四季此歌を記り

夕とをせん

折風のきくるよ草花の曲ハ何

五月五日を祓月次の初會に

交りて流るも事ふれあやめぬ

為言三層の主を考と差うんて

ほとあゝこれ日事とゆふると

うや一層士二層考といつとけ

きとりまゝいふうて目もあふ

（）

（三）

（多）

（五）

止まらぬ又亦ハ止ま心也
尹れ子よやうと〜〜〜今更
りふつきよもあ〜〜〜ハ
るふせふと色の御〜〜
七十此多と子に〜と結る

亦のまれその子此ま子その子ま〜

カかろの百子に〜

同進て才品らら解〜のむら〜ハ

弘の甚けよ〜

さむけり 旅さばや 市のみきり

張の魚巴よ ぶい

卯のむや 張海も 静きら 皇之北 雲

加かえの 山 藤々 同 あり

之船を めく くる あり

封切ハ いろや 神 同 此 之 船 小

大和の 小 上 連 船 と 也 充 ち

所 あり 日 あり 山 田 村 の

急 子 あり 船 あり あり あり

〇 〇 〇

〇 〇 〇

その形ははれぬ

おとすもあふはれりみそけ

まをさうくふ号を結るに

丁亥の娘も系ふられはれはる意の言

加賀のふ代女は清よめをさす

九重と一重とくちあはれよ百なうれ

茶林をほろり系良はあし時

うきまや濁るぬふの嘆所

加賀の素心尼々家多摩也

同本已一に

後孫く道子吸もや麻子百名

東武何系に訪ま〜

下野や味しとさなれまよれ定

後の穉次よ穉宿也〜

孤れ穉仙〜訪ま〜

懐の原の穉次〜お〜きん

○
蘇原の冬花うと訪ひるに
初子山々の庭の龍吟の音に

山々 庭に 松の 影を けし 牡丹に

十方庭 庭の 影を けし 牡丹に

三宿の 影を けし 牡丹に

をりて 影を けし 牡丹に

をりて 影を けし 牡丹に

をりて 影を けし 牡丹に

をりて 影を けし 牡丹に

をりて 影を けし 牡丹に

予の市中に川を中へ下りて
宗居より〜宗居より〜
豆屑より〜温飴の
さめぬはあ人の世なり

糸菓子山崎舟〜枝形〜

何系に訪き〜

氷鷲〜枝形〜ハ同甘菓子

加賀の又変てな世と同好〜
一柱乃〜者なるこの解子
お日〜同新の甘菓子

① 秀のなれ初方ととを信じた

秀のなれ初方ととを信じた

花渚子孫ふ日サ戸呂人

明鏡は柳のうろたふと

ふらふらむくわをれ柏子や風車

加賀の之を人よあし

卯のむやふとをれ初方ととを信じた

葉好若をくふふそはつとを信じた

月ふの同定くさや茶此白心

活の仙好きは形い

あゝ好方へ吹水や 同車

大和文若く新室子納涼

葛水や吉地此たの一新店敷

下の方席のこい活の深泊

系杖を脚多くうふ茶心

閑者い為之居の初程

長麻と白眼

同く、いふに同く、いふに、いふに、いふに、

幻々、唐詞、古田、

涼、いふに、いふに、いふに、いふに、

大加、冬、心、いふに、いふに、

塚、いふに、いふに、いふに、いふに、

安、流、津、系、氏、いふに、いふに、

丁、好、いふに、いふに、いふに、いふに、

高野、女人、堂、いふに、いふに、

百有七その姫くふ名子志何くく在

与那蛇極子く

永同よし極く刀心く涼しきん

高地不食虫みく

行と名西木と客研と不乃時

1913
N
1

系

里

07
3

099
150
N
1



三重県立図書館



140018128